

DDH : 観血整復

座長 : 亀ヶ谷 真 琴・服 部 義

DDH の観血整復の演題が 6 題報告された。広範囲展開法の成績が 3 題、観血整復とソルター手術の合併手術、関節鏡視下整復術が各 1 題、また海外からの招待演者として Dr. Moseley が観血整復後の再脱臼例の検討を報告した。

今回の報告にもあるように、最近日本では観血整復法として広範囲展開法が選択されることが多くなってきた。本法は他の観血整復法に比し、よりよい求心性が得られる手術法であることは認められているが、侵襲の大きさもあり、変形性股関節症につながる軟骨障害の危険性を危惧する意見もある。さらなる長期の経過観察が必要であるとともに、いつ、どのような症例に対して観血整復に踏み切るかの検証を今後行う必要があるだろう。また今回掲載されている論文を読むと、術直後によい求心性が得られれば術式にかかわらず成績がよいということであり、これは Dr. Moseley の報告とも一致していた。一旦観血整復を行うことを決定すれば、いずれの術式を選択するにしてもよい求心性を得るように徹底的に工夫、努力するべきであるという結論であろう。

(文責 : 服部 義)